

# 常照

佛教大学附属図書館報

2023

NO. 70



佛教大学附属図書館

50年後に読む『日本列島改造論』

附属図書館長・社会学部教授 藤井 透

1

金戒光明寺「日鑑」の研究と歴史史料のデジタル化

仏教学部仏教学科准教授 坪井 剛

2

「意味の網目」としての辞書と図書館

文学部英米学科准教授 メドロック 皆尾 麻弥

6

絵本とともに、子どもの権利の視点を社会に

社会福祉学部社会福祉学科准教授 長瀬 正子

10

図書館に寄せて

保健医療技術学部看護学科教授 中島 小乃美

14

電子コンテンツに関するライセンス情報の開示

—図書館サービスの新たな潮流

図書館専門員 飯野 勝則

18

佛敎大学附属図書館の事業活動報告（2022～2023年度前半期）

21

佛敎大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

25

# 50年後に読む『日本列島改造論』

附属図書館長・社会学部教授

藤井 透

わたしが担当している講義で、田中角栄（1918～1993）にふれることはあるが、学生から何の反響も返ってこなくなっている。しかし、わたしの記憶の中で田中は居心地の悪さとともに存在している。およそ30年前に学振の特別研究員であった頃、ロンドンに短期留学をした。LSE附属図書館で、自分にとって「宝の山」を目の前にして、資料に没頭した。しかし、いくら若いからといっても、疲れぬはずはない。研究に疲れたら、わたしは広大な館内で、さまざまなジャンルの本の背中を眺めながら、「散歩」をした。ある日、「散歩」の途中で、田中の『日本列島改造論』（以下、『改造論』）の英語版を偶然、見つけ手に取った。日本語版も読んではいなかったのに、ロンドンで英語版を手にとってしまったことに、非常に居心地が悪かったことを、今でも鮮明に覚えている。

1972年に公刊された『改造論』の復刻版が本年3月に、出版された（日刊工業新聞社）。『改造論』は刊行直後、田中が首相になったことも手伝い、90万部のベストセラーとなった書である。わたしは、刊行から50年後にはじめて『改造論』を読んだ。たしかに、『改造論』は、1990年代以降、グローバル



化が進み、主に製造業を中心とした「産業の空洞化」が日本を覆うようになることを予見してはいなかった。雇用者のうち非正規雇用者が4割を占めるようになる日本社会を、想像だにしていなかった。しかし、『改造論』が高度経済成長の終焉を告げる1973年オイルショックの直前に刊行されたこと、田中自身も昭和60（1985）年あたりまでを視野に入れた日本の産業構造のあり方を主に、国土利用の観点から描いていたことなどを忘れてはならない。『改造論』は「予言の書」ではないのだ。しかし、大変、面白かった。

わたしが面白いと感じたのは、田中が「日本のこの進路を一言にして要約すれば『平和』と『福祉』につきよう」（39頁）と断言していた点である。田中が首相だった1973年が、日本における「福祉元年」の年だった。これには、文中にもあるように（62頁）、当時の美濃部革新都政をはじめ少なからぬ数の革新系の知事や政令指定都市の市長が誕生したこと、田中が危機感を抱いたことが大いに与った。過去50年間の国際政治を取り巻く環境の変化は著しいが、『改造論』は、当時の国内政治の緊張感がもたらした産物でもあった、とわたしは読む。

# 金戒光明寺「日鑑」の研究と 歴史史料のデジタル化

仏教学部仏教学科准教授 坪井剛

## 金戒光明寺「日鑑」研究の経緯

二〇二二年四月より、本学の法然仏教学研究センターにおいて、「黒谷金戒光明寺「日鑑」研究班」を立ち上げることとなった。その名の通り、金戒光明寺の公用日記である「日鑑」を調査・翻刻し、そこから江戸期の浄土宗史を検討していくことを目的とした研究班である。

この金戒光明寺「日鑑」について、これまでの研究ではその一部に触れているものはあるものの、全体を通しての翻刻・研究は行われていないようである。そういう意味ではまだ「手つかず」の史料ということになり、その読解を進めていくことで、これまで明らかになっていなかった多くの史実を掘り起こすことができるだろう。現在、本プロジェクトで撮影した「日鑑」のデジタル画像データを図書館に所蔵してもらっていることから、こ

こではその概要と、歴史史料のデジタル化についての雑感を少し述べてみたい。

## 金戒光明寺の火災と「日鑑」

さて、金戒光明寺は現在、浄土宗の大本山の一つとして位置づけられており、「黒谷さん」の名前で京都の人々に親しまれている。本学としても、浄土宗教師資格の取得を目指す学生が道場生活を送る「黒谷道場」を同寺境内に設置しており、大学・学生にとっても由縁のある本山の一つではないだろうか。寺伝によれば、法然が師である叡空から譲られた房舎がその原型であるとされており、これに従うと、浄土宗総・大本山の中でも、とりわけ古い歴史を持つ寺院ということになる。

一方で、京都市中の近隣にある寺院としての宿命であろうか、応仁の乱では「仏殿・僧坊悉く灰燼に帰し」（黒谷誌要）たようであり、それ以降も度々の火災に遭っている。江

となった。人生はなかなか計画通りに行かないということを感じている。さておき、まさに一から研究を進めていくことになったわけだが、研究を進めるに当たって、まず行き当たったのが、史料の画像に関する問題である。

金戒光明寺が所蔵している文化財については、『大本山くろ谷金戒光明寺 宝物総覧』（思文閣出版、二〇二一年）が出版されており、所蔵する古文書や古典籍・絵画・仏像などの鮮明な写真が、詳細な解説とともに載せられている。この『大本山くろ谷金戒光明寺 宝物総覧』でも「日鑑」は紹介されているが、残念ながら、全編の写真が掲載されているわけではない。というのも「日鑑」は、上述の安永五年以降、現在に至るまで連続と書き継がれているため、膨大な量となるからである。

現在、確認して

いるところでは、

少なくとも幕末までの九十年余りに限っても、百六十冊が現存している。その目録については、また『法然仏教学研究センター紀要』などで報告する予定で



戸期に入ってから、慶長十七年（一六二二）九月十三日には御影堂などが炎上、安永五年（一七七六）十二月二十七日にも御影堂・大方便をはじめとする堂舎が火災で焼失している。今回、研究を進めている金戒光明寺「日鑑」は、まさにこの安永五年十二月二十七日以降のものが残されており、記事は出火の様子を記録するところから始まっている。恐らくこれ以前の「日鑑」は、この火災で烏有に帰ってしまったのだろう。

## 「日鑑」の概要とその撮影

さて私自身は、中世の仏教史、特に鎌倉期の専修念仏教団について研究しており、正直、近世の仏教史は専門外である。もし長生きすることがあれば、江戸期の浄土宗史についても主体的に考える機会があるかもしれない……といった程度にぼんやりと考えていたが、思いがけず近世浄土宗史に足を踏み入れること



撮影風景

あるが、年数よりも冊数の方が多いのは、一年分の記録が二冊以上に分かれている場合が多いからである（元から分冊されているものもあるが、近年の修理で分冊されたものもある）。一冊分の丁数は、平均すると百二十丁ほどとなり、多いものでは二百丁を越える。

このように、「日鑑」は量が膨大であったため、本山側でも「日鑑」の詳細な撮影はされていないようであった。そうなる、翻刻・研究に利用するためのデジタル画像を一から撮影することが必要となる。

そこで当初、私と学生が金戒光明寺に行き、試みに撮影を行ったが、残念ながら研究に堪える写真を全て撮りきることは難しいと判断された。そこで本山側にもご協力いただき、文化財の撮影を専門としている清水光芸社に撮影をお願いすることとなった。右の写真はその撮影風景である。テントを張って光量をコントロールし、古典籍の撮影のために工夫された専門の機材を用いることにより、



金戒光明寺「日鑑」(安永5・6年)の撮影画像



『大本山くろ谷金戒光明寺 宝物総覧』  
思文閣出版、2021年

文字のはね・はらいや虫食い跡の形まで確認できる高精度のデジタル画像を撮影することができた。現在、幕末までのうち半分強を撮影してもらっており、近いうちに撮り終えることを目標としている。

### 「本山黒谷諸国末寺帳」と「日鑑」

さてこの画像をもとに、研究班では少しずつ翻刻を進めているが、「日鑑」は基本的に一日も欠かさず記録されているため、その情報量は膨大なものがある。記事内容も本山での法要や住持の動向だけでなく、訪問者とのやりとり、山内人事、近隣寺院や末寺とのやりから発信した書翰への対応とその写、本山から発信した書翰の写など、実に多岐にわたっている。特に安永五年からの「日鑑」では、火災からの堂舎再建の様子だけでなく、いわゆる宗名論争（浄土真宗）の名称を巡る浄土宗・真宗の論争）に対する本山側の対応なども記されており、大変興味深い。

ただ、翻刻に当たって注意を要するのは、記事に登場する地名や寺院名・人名などの固有名詞を正確に読み取ることである。これらは文脈から読み取ることが難しいため、できるだけ他の史料などで裏取りをしていく必要が生じるからである。

その際、まず参考となるのは、金戒光明寺の寺誌である「紫雲山黒谷略記」や「黒谷誌」刻するだけで一年以上の年月が掛かっているのが現状である。今後、『法然仏教学研究センター紀要』などでその成果を順次、発表していく予定であるが、いかにスピードアップするかが課題となるだろう。ただ正直、私が生きている間に全編の翻刻が終わることはないように思われる。

そういった事情にも鑑みて、今回、研究班で撮影した「日鑑」のデジタル画像を本学図書館にも所蔵してもらうこととした。「日鑑」については、WEBでの画像公開やデータの頒布を行う予定はないが、今後、閲覧を希望される方には、学内限定で確認できるようにしたいと考えている。これにより、研究班が作成した「日鑑」の翻刻をチェックしてもらうことが可能となるだけでなく、まだ研究班の翻刻が追いついていない年代の記事の画像を見てもらうこともできるようになる。撮影から図書館での閲覧まで、ご理解を頂いた金戒光明寺様に感謝したい。

近年、人文学分野においてもデジタル化の影響はとて大きく、多くの歴史史料のデジタル画像が様々な形で作成・利用されている。WEBで公開されているデジタル史料画像も多く、日本史学分野に係わる有名なものだけでも、国会図書館デジタルコレクションや国立公文書館デジタルアーカイブ・東寺百合文書WEBなどが挙げられる。また、これ以外にも多くの公立・大学図書館などがそれ



「本山黒谷諸国末寺帳」  
(請求記号 旧256 31)

要」である。前者は元禄五年（一六九二）に作成、後者は明治期のものであるが、それぞれ歴代住持の事蹟や伽藍・塔頭の沿革が体系的にまとめられているため、重要な裏取り史料となる。

また、諸国に散在する末寺については、地名辞典類も参考となるが、何より金戒光明寺が所蔵する「金戒光明寺塔頭末寺帳」が重要である。本書は、金戒光明寺の塔頭・末寺・末々寺を国ごとに記したもので、正確な作成時期は分からないが、書き込まれる年代の下限が寛保二年（一七四二）であることから、江戸中後期にまとめられたものではないかと推定される。

この末寺帳は活字化されていないようであるが、本学図書館では金戒光明寺本の写本とみられる「本山黒谷諸国末寺帳」を所蔵している。本書の末尾には「日照山 齋誉」と記されており、これは京都西院にある高山寺の二五世齋誉純豊和尚（一八一九〜七七）に当

それぞれ所蔵する貴重史料の画像をホームページ上で公開するようになってきた。

そして、デジタル画像だけでなく、様々なテキストデータの公開も進んできている。これによって、史料を横断的に検索して、検討していくことも可能となってきた。こういった現状を反映してか、毎年、前年の研究成果を総括する企画である『史学雑誌』「回顧と展望」では、二〇二二年の日本中世史分野に図書・史料の「オンライン公開情報」の項目が立てられた。これは、デジタル画像やテキストデータの公開が広がり、単に研究者同士の情報交換だけでは追いつかなくなってきた現状を表しているのだろう。

当然、史料写真はあくまで原本の代替に過ぎず、原本を熟覧することによって得られる情報量には敵わない。また、デジタル画像の利

たると考えられることから、幕末から明治期に写されたものと思われる。記載は金戒光明寺本と多少の差異はあるが、内容は大きく変わらない。

これらの末寺帳を見ると、江戸中後期の金戒光明寺には、塔頭・末寺・末々寺などを合わせて四百二十ヶ寺ほどが所属していたとされており、東は陸奥国から西は石見・安芸・伊予国に至っている。それぞれの寺院名には、その所在地だけでなく、土地の区分（年貢地・御免地・除地）や創建年・開山上人名などが整然とまとめられており、金戒光明寺側が調査した上で本書を作成したことが窺われる。それ故、「日鑑」に登場する金戒光明寺の塔頭・末寺について確認するには、これらの末寺帳を参考にすることが最も確実な手段となるだろう。

他にも人名については、『寛政重修諸家譜』や『系図纂要』などの系図類が参考となるし、上記の『大本山くろ谷金戒光明寺 宝物総覧』にはいくつかの境内伽藍図も収録している。これらを参照の上、内容を整合的に解釈しながら、くずし字を一文字ずつ確定する作業を行っている。

### 歴史史料のデジタル化

さて、記述内容の理解とその翻刻はとても時間のかかる作業で、一年分の「日鑑」を翻

用にも、その公開範囲や所有権・保存場所など様々な問題がある。ただ、現在の我々の生活がネットやPC無しでは考えられないのと同様に、既に人文学研究において、こういったデジタル技術は欠かせないものとなっている。そのように考えると、史料の原本だけでなく、特定分野の史料画像を収集することで、当該分野の研究拠点となるような図書館も今後、多くなってくるのではないかと。アナログなくずし字をデジタル画像で見ながら、そのようなことをつらつらと考えている。

（謝辞）本稿の作成にあたり、黒谷金戒光明寺様、同執事長橋本周現上人、高山寺住職稲岡良将上人から史料閲覧の許可及び情報のご提供を頂きました。ここに篤く御礼申し上げます。



坪井 剛 仏教学部仏教学科准教授

1980年、京都市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位認定退学。博士（文学）。京都造形芸術大学専任講師・准教授を経て現職。主な論文に「「建永の法難」事件再考—訴訟過程の検討を中心として—」（『古代文化』66・1、2014年）、「良忠の「付法状」発給とその背景」（『日本仏教総合研究』20、2022年）など。

# 「意味の網目」としての辞書と図書館

文学部英米学科准教授  
メドロック 皆尾 麻弥

boron triazine that is formed by heating boron and ammonia and has a structure like that of benzene with alternating boron and nitrogen atoms in a ring — called also *triborine* *triamine*  
**bor-a-zon** \ 'bōrə,zān, 'bōr- \ *n* -s [ *bor-* + *az-* + *-on* ] : a crystalline boron nitride as hard as a diamond but more resistant to oxidation at high temperatures  
**bor-bo-ryg-mic** \ ;bōrbə;rigmik \ also **bor-bo-ryg-mat-ic** \ -(.)rig;mad-ik \ *adj* [ *borborygm* fr. *borborygmus* + *-ic*; *borborygmatic* fr. NL *borborygmat-*, *borborygma* *borborygmus* (alter. of *borborygmus*) + *E -ic* ] : of, relating to, resembling, or affected with *borborygmus*  
**bor-bo-ryg-mus** \ ;bōrbə;rigmās \ also **bor-bo-ryg-my** \ 'bōrbə;rigmē \ *n*, *pl* **borboryg-mi** \ -rig,mī \ also **borboryg-mies** \ -,rigmēz \ [ *borborygmus*, NL, fr. Gk *borborygmōs*, fr. *borboryzein* to rumble, of imit. origin; *borborygmy* fr. Gk *borborygmōs* + *E -y* ] : a rumbling sound made by the movement of gas in the intestine  
**bord** \ 'bō(ə)rd \ also **board** \ 'bō(ə)rd, 'bō- \ *n* -s [ 'board; prob. fr. the former practice of laying boards in mine passageways to form a relatively smooth surface along which the coal was dragged in sledges ] : a straight road or passageway driven at right angles to the main cleavage of the coal in a coal mine  
**bor-dage** \ 'bōrdij \ *n* -s [ OF & MF, fr. OF *borde* hut, cabin + *-age* ] : the tenure or services of a *bordar*  
**bord alexander** \ ;bōrd, -ō(ə)d+ \ *n*, *usu* *cap* *A* [ alter. (in-

『Webster 3』borborygmus

「図書館」という概念が好きだ。図書の一貸出し」ということばを見たり聞いたり発音したりすると、脳みそのどこか、快感を伝達する部分が激しく反応するし、おいしいお菓子を口にしたときのような、味覚的刺激まで感じる。これはおそらく、私の図書館原体験が、あまりにも幸福に満ちたもので

さらに私はこの頃からすでに、図書館で本を読んだり勉強したりすることができない人であった。図書館を含め、公共の空間で本を読んだり勉強したりする能力が、私には欠けているのである。電車や飛行機に乗るときは必ず本を携えているし、本を開きもするのだが、内容はあまり頭に入っていないから、何度も同じ文章を行ったり来たりする。おそらく私は、外界からの刺激をうまく遮断することができないのだ。図書館という静謐な空間においてさえ、そこには私以外の人がいて、私だけの空間でない、という理由だけで、もう読書や勉強は不可能なのである。図書館から足が遠のいている理由は、ここにもある。

そうしたわけで、私にとって、本は購入し、自分の所有物にしたのち、自分の家の中で読むものなのだ。佛教大学附属図書館の蔵書検索で見つけた書物も、「ああ、借りよう」ではなく、「ああ、研究費で購入しよう」ということになってしま

う。それにしても、やはり図書館がその威力を発揮するのは、辞書のコーナーであろうか。私が専門に研究している、ロシア生まれの小説家ウラジーミル・ナボコフは、「よい読者」を、「想像力と、記憶力と、辞書と、芸術性」を持ち合わせた読者、と『ナボコフの文学講義』の中で定義している。ナボコフ先生に忠実な愛読者は、そういう読者にならんと日々、鍛錬に勤しむわけだが、想像力や記憶力や芸術性には個人差も限界もある。しかしながら、この項目中で「辞書」は唯一、物理的で、個人差や限界とは無関係なものであり、これならばなんとかなりそうだ。とはいえ、辞書ならばどれでもいいというわけにはいかない。

本学図書館に所蔵されている、20巻セットのずっしり重たいオックスフォード英語辞典(いわゆるOED)は、もっとも

あったことが原因であろう。母校、米子市立福米東小学校の図書館は、それはそれは夢のような場所だった。夢のような場所すぎて、夢に出てくる三大舞台の一つがこの図書館である。現実のものよりもずっと大きくて、ジャンガルのような、あるいは迷路のような、マジカルな場所として、今でもよく夢に見る。

小学校の図書館は、幼い私にとっては無尽蔵にも見える、たからものありかであった。借りても借りても、次々と、さらにおもしろい本が目の前に現れて、それはもう尽きることのない喜びであった。また、優れた学校司書の存在も大きかったように思う。どことなく私の叔母に似た、司書のレディーがいることで、学校図書館に権威と秩序(とてもいい意味での)が与えられていたと思う。図書館司書は今でも私の「憧れの職業」だ。福米東小学校の図書館はこのようにして、マジカルでありつつ、安全で、信頼に足る、完璧な場所であった。

ところがどうしたことであろうか、図書館との蜜月は中学校入学とともに終了し、私にとって本とは、所有して楽しむものへと変わってしまった。本好きの子どもは、借りるだけでは飽き足らず、本を自分のものにして、自分の部屋の本棚に収める・飾る、という欲望にとりつかれてしまったのだ。かくして私の夢の場所は、図書館から「今井書店」(山陰における最大の書店グループ)へと変わり、そのまま現在へと至っている。

権威のある、頼りがいのある英語辞典であり、たいていのことばはこの辞書がカバーしてくれる。それぞれの語の歴史から、豊富な用例、引用まで、至れり尽くせりの読み物としても優れている。私はこのセットを所有していないので、ときどき図書館に行つて参照する必要があるが、ついつい当初の目的を忘れて読み耽ってしまうから厄介である。

しかしながら、ナボコフの作品を読むときに、この一見すると万能なOEDが最適かという、実はそうでもない。ではどれが最適かという、当然といえば当然のことながら、ナボコフ自身が実際に愛用していた辞書である。『Webster's Second International Dictionary, Unabridged』(1934)、『ウェブスター国際辞典第二版』、以下、『ウェブスター2』とする、これがナボコフお気に入り、お墨付きの辞書で、彼の愛読書とも言えるかもしれない(OEDも購入したらしいが、それは晩年になってからのようだ)。

1920年代、ロシアを亡命し、ベルリンに住んでいたナボコフは、ロシア語を忘れてしまうことを恐れ、日々『現用大ロシア語詳解辞典』(ウラジーミル・ダーリ編纂)を貪り読んだ。この4巻ものの辞典は、ロシア中をまわって民衆が実際に使っていることば(20万語にもものぼる)をたった一人で



『アーダ』早川書房、2017年  
難語満載のナボコフ晩年の作品『Ada』日本語訳

『ナボコフの文学講義』  
河出書房新社、2013年

『The Oxford English dictionary』  
オックスフォード英語辞典

収集したダリーによる、それぞれのことばの「詳解」が特徴で、ロシア語の辞書というよりも、ほとんど読み物として通用する優れた大辞典である。さて、同じようにナボコフのちに貪り読んだのが『ウェブスター2』であり、その習慣は60年代にアメリカからスイス・モントルーへ移り住んだあと、なおさら顕著になる。すなわち、フランス語圏であるモントルーにおいて、今度はロシア語ではなくて英語を保持するために、『ウェブスター2』をめくることが日課となった。ナボコフの伝記作者ブライアン・ボイドによると、この辞書から *kinbote*、*versipel*、*caruncle*、*borborygmus*、*granoblastic* などの風変わりな語を拾い集め、メモしていたという。

すなわち、ナボコフの英語作品を読む際に、もつとも有益な参考書が『ウェブスター2』なのである。残念なことに、本学図書館はこの辞書を所蔵していないのであるが、代わりに『ウェブスター3』を閲覧することはできる(さらに、このたびの小論執筆にあたって発見したことは、本学図書館にはナボコフ本の蔵書が驚くほど少ないことだった。しかしながら、『ウェブスター2』には掲載されていたものの、『ウェブスター3』からは削除されてしまった語も多く、やはり『ウェブスター2』に勝るものはないのである。

例えば、上に挙げた *versipel* などがその一例である。小説『淡い焔』(1962年)は、詩人ジョン・シェイドによる99行の詩『淡い焔』に、チャールズ・キンボート(上に挙げた *kinbote* が名前として採用されている)がつけた長大な注釈と、索引からなる小説であり、上述の *versipel* は詩の947行目に、My

*versipel* (森慎一郎訳では「我が変幻の友」)、という表現で使われている。Versipelは「姿を変幻自在に変えることができる生き物、妖精」といったような定義で『ウェブスター2』に掲載されているようだが、『ウェブスター3』には見つからない。あまりにも用例が少ない、といったような理由で消えてしまったらしい。

『淡い焔』において『ウェブスター2』は、確かに大きな意味を持っていて、たとえば実際にキンボートの注釈中にも、詩人シェイドの愛用辞書として「聖書のごときウェブスター」(同じく森訳より)と言及される。シェイドの詩(それは言わずもがな、ナボコフの詩ということでもあるのだが)にはウェブスター辞典から集められた、骨董品のような語がそこに散りばめられているのだ。そこで気づくことは、『淡い焔』と、ナボコフが手がけた、ロシアを代表する詩人、プーシキンの詩『エヴゲーニー・オネーギン』の訳注との重なり、『ウェブスター2』が関わっているという点である。ナボコフの『訳注 エヴゲーニー・オネーギン』は、詩の英語訳と膨大な注釈からなっていて、『淡い焔』と構造的にも重なる。また、『エヴゲーニー・オネーギン』の仕上げと同時期に、『淡い焔』に着手し始めたということもあり、この二作にはつながりがある。

プーシキンのロシア語を英語に訳す際、ナボコフが使用したのももちろん『ウェブスター2』であり、プーシキンが『エヴゲーニー・オネーギン』で使っている、あれやこれやの変わった・古風なことばに最適な英単語を、この辞典を念入りに引くことによって探し当てた。その結果、ナボコフによる翻訳には、シェイドの詩がそうであるように、珍奇な英語表現が多出することになり(例えば、*vospomya* という古風なロシア語には *rememorating* という変わった語をあてている)。

しまわないことを祈るばかりである。

ジョン・シェイドの『淡い焔』810行に、*A web of sense* (意味の網目) という表現が出てくる。本当に大事なポイントは何かというシェイドの答えとして、「テキストじゃなく織り地」<sup>テクニカル</sup>、「薄っぺらなナンセンスじゃなく意味の網目」という具合に。この *web* は *Webster* とも響き合っているに違いない。『ウェブスター』はまさに意味の網目からできているように見える。そんな意味の網目を内包する、さらに大規模な網目状の巨大迷路が、図書館である(『淡い焔』の終盤において、まさに図書館と書架が迷路として描かれている)。そのようなわけで、本学図書館で、『ウェブスター2』(と、森慎一郎訳『淡い焔』)が揃えばうれしいです。

『見てごらん道化師(ハーレクイン)を！』  
ウラジーミル・ナボコフ(著)、メドロック 皆尾 麻弥(翻訳)  
作品社、2016年

エドモンド・ウィルソンなどはこれに苦言を呈するほどだった(ナボコフはそれに猛反発し、「ウィルソン氏は絶対に『ウェブスター2』を入手すべきである」と強く勧めているからおもしろい)。それはともかく、『エヴゲーニー・オネーギン』執筆の際に『ウェブスター2』を引きまくったその余韻が、『淡い焔』には聞き取れるのである。ナボコフは、ウィルソンへの反論の中で、ほとんど廢れた古風なことばを使用することで、そのことばを「生き返らせる」ことができると言っている。実際に *versipel* などは、辞書からは消えてしまったものだが、ナボコフの『淡い焔』が存在する限り、生き続けるわけである。そういう意味で、ナボコフの作品は、絶滅から救われた希少な語の保護地ともなっている。

私たちが注目したいのは、ナボコフがこのように辞書や辞典を熱心に研究する研究者であったということである。文学研究において、よい辞書、最適な辞書を引くということは、もつとも大事な手続きであると私は考える。辞書を丹念に引き、というよりも丹念に読み込み、それによって作者とコミュニケーションすること。外国語話者でもあったナボコフのその姿勢は、外国語文学を研究対象とする者にとって、常にモデルである。ひるがえって、ここ最近、辞書の存在感の希薄さを感じざるをえない。学生はもう辞書なんか引かず、検索で(あるいはもつと優れた、私にとつては口にするのも憚られる媒体によって)外国語の文章を訳してしまう。それで事足りるのならいいのだけれど、私みたいな古い体質の人間にしてみれば、なんだかかわいそうだなあ、という印象である。辞書にはいろんなすごいことが書いてあって、いろんな知識が身につくのに。辞書を引く手間によって読解力が身につくのに。辞書を読むとおもしろいのに。とか、余計なお世話だろうけれど、思ってしまうのである。辞書がこの世から消えて

## メドロック 皆尾 麻弥

文学部英米学科准教授／国際交流センター長

鳥取県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。山口大学講師を経て現職。専門分野はアメリカ文学、とりわけウラジーミル・ナボコフの作品研究。主な論文に、「ナボコフのベンチを訪ねて」(日本英文学会『英文学研究』第82巻2005年)、「ハンパートの目にも涙」(『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』研究社2011年)、「Entrance and Exit in Nabokov's *The Gift*」(Kyoto University, *Humaniora Kiotensia On the Centenary of Kyoto Humanities*, 2006年)、「変身の痛み--Iris Blackを通して再読する *Look at the Harlequins!*」(日本ナボコフ協会 *Krug* 11号2018年)、「菊地孔礼の『スペインの宇宙食』と『ロリータ』-『ロリータ』常習者による妄想を妄想的に読む」(日本ナボコフ協会 *Krug* 13号2020年)など。

# 絵本とともに、 子どもの権利の視点を社会に

社会福祉学部社会福祉学科准教授 長瀬 正子

だいが産まれなかった子どもに向けた絵本、保護者が入院することを伝える絵本、さまざまな状況を生きる子どもに何が起きているかを分かりやすく伝える絵本がありました。(12ページの写真は、トロント市で収集した絵本の一部です)

そして、子どもの権利の観点から考えると、絵本は子どもの意見を形成することを助けるツールでもあります。おとななどの情報共有と対話は、意見表明・参加の権利(子どもの権利条約第12条)を形作る大切な要素ですが、絵本をともに読むことはそのプロセスを実現するものです。なにより、私自身、絵本には娘とのコミュニケーションにおいて何度も助けられてきました。これらの経験から、2017年より子どもを育ちを助けるひとつのツールとして多様な絵本を紹介するwebサイト「ちいさなとびら」を運営しています。

絵本展のテーマは、学生たちと「どんな場にしていきたいか」、「何を大切に運営していきたいか」を出しあい、皆が実現したいイメージに重なる言葉に決めていきます。今年度は「ゆかいに進む」、「自分の心のなかを旅する」、「心に残る」といったキーワードから「旅する」がテーマとなりました。

選書をする際に、大学図書館の絵本コーナーは大きな存在です。学生たちは、排架されている絵本を手にとったり、読んだりしながら選書しているようです。あるいは、子ども

## 絵本展のはじまりと現在

コロナ下で休止していた絵本展を再開して2年目になります。2023年度は「旅する絵本展」というテーマで行いました。

もともとこの絵本展は、2010年から林悠子先生が社会福祉学部の活動「縁子どもグループ」により始められました(「常照」第63号参照)。林先生がなさっていた当時、私は、就学前だった娘とともに、毎年絵本展に足を運んでいました。娘が学生たちに遊んでもらっている間、自分は絵本を読んできつろがせてもらっていました。

子育て中、子どもも保護者も、ともに安心してほっとできる時間や空間はそれほど多いわけではありません。短期間であれ、学内であたたかくて、ゆっくりできる居場所を開くことは大切なことではないかと考えてきました。



「旅する絵本展」のポスター

もの頃に読んだ絵本を思い出して選書をする学生もいます。絵本展では、選書された絵本とともに、選書の理由やその絵本の魅力についてのコメントを書き展示します。大学図書館には、過去の絵本展の学生のコメントが展示されています。よかつたらご覧になつてください。

## 子どもの権利にふれる学びの場を

絵本展を再開する際に、実現したかったことのひとつは、絵本展に来てくださった子どもと保護者が、楽しみながら学ぶことができるイベントを実施することでした。私は、子どもの権利を研究し、仲間とともに日本の社会にその視点を広める活動(「子どもの権利・きもちプロジェクト」)をしているので、子どもの権利につながる内容にしたいと考えました。日本で、子どもとおとなが子どもの権利のことを体感的に学ぶ機会は多くありません。そして、学生にとっても、芸術を用いた子どもへのワークショップ等を実際に経験することは、大きな学びになるのではないかと思います。

そうした思いから、今年度は、絵本作家のえがしらみちこさんをお招きして、「じぶんのえほんをつくろう」という子どもと保護者を対象にしたワークショップを企画しました。「うれしいじぶん」「おこっているじぶん」○○



学生の手作りコメントを紹介

た。絵本展には、子育て世帯はもちろん、ひとり来場される方も多くいらつしやいます。絵本展の開催はたった6日間でしたが、今年度は263名(うち子ども70名)の方が参加してくれました。

また、日頃から絵本の魅力を多くの方に体感してほしいという思いもありました。絵本は、楽しみ、心豊かにいることを支えるだけでなく、苦しい時や生きることがつらいときにも寄り添ってくれるものです。2013年にカナダのトロント市に訪問した際に出会った絵本からは、特にその後者の絵本のありように気づかされました。流産か死産できよう



「旅する絵本展」の様子



なじぶん」「ぜんぶじぶん」という見開き8ページの自分の絵本をつくるワークショップです。

この企画を考えた当時、えがしらさんとは、2023年6月末に発刊された『ようこそ

「ト」というテーマで、えがしらさんといっしょに対面とオンライン配信でトークイベントを実施しました。えがしらさんと私は、同世代の子どもを育てる親という共通項をもつつも、子どもの権利を知った時期や出会いは異なります。イベントでは、えがしらさんがどんなふうに子どもの権利という考え方に出会い、深めていかれたのかを、じっくりお聞きすることができました。当日の様子は、佛教大学公式YouTubeチャンネルにて現在も公開されていますので、ぜひご覧ください。

ここで、絵本展を再開したこの2年間で振り返り、述べてきました。ただ、今ここに書いていることは、最初から頭に思い描いて実行したというわけではありません。当時、コロナ下もあって、地域でさまざまな子どもの深刻な状況を耳にしていました。また、日本社会全体を見渡してみても、子どもの虐待、子どもの自死、不登校など子どもをめぐる状況は厳しさを増しています。子どもは、「現在」を生きる存在であり、その「現在」を大切にすることが私たちおとなの大切な役割ではないでしょうか。

しかし、なかなか解決策が見出されにくい状況のなかで、その子どもの「現在」が大切にされないまま、時間だけが経過していくこともどかかじさがありました。今すぐの解決策にはならなくても、「何か地域で、大学という『場』の力を借りながら、子どもにかかわっ



えがしらみちこさんによるワークショップの様子

こどものけんりのほん』（白泉社）の底本となる、育児情報誌『コードモエ』の付録絵本制作をともにしていました。子どもの権利は、2023年4月に施行されたことも基本法の骨子となる理念です。『ようこそ こどものけんりのほん』は、子どもの権利という考え方を就学前の子どもから理解できるようにつくった本です。えがしらさんが絵を担当し、私が代表をつとめる子どもの権利・きもちプロジェクトが文を書いています。えがしらさんの描く伸びやかな子どもたちの姿が、難しくとらえられがちな子どもの権利の理解をやさしく

て、対等に、ゆるやかに、学びとともに語り合える場をつくれなにか」という思いがありました。

同時期、学内ではオープンラーニングセンター（O.L.C.）が2021年度に立ち上がり、さまざまな講座が構想された時期でした。上に述べたような私の思いと、O.L.C.が新たにスタートする講座を依頼してくださったタイミングとが重なったのです。そうして、2022年度から、O.L.C.では、「子どもの『声』を聴くわたしになる」という講座が始まりました。昨年度は居場所をテーマに、今年度はこども基本法に盛り込まれなかった子どもコミッションナーをテーマにしてきました。体感的な学びを重視することからオンラインだけでなく、対面の開催もある講座ですが、遠方からも多くの方が参加してくださり、今年度は5回の講座で延べ190名の方が参加してくださいました。

子どもの権利という考え方は、こども基本法が制定された現在、子どもにかかわるすべての対応や方針に取り入れていく必要があるものです。大学という「場」を、地域に開き、まだ社会で十分に浸透していない、でも、必要とされている考え方をともに学ぶ機会をつくっていくことも、大学が果たす社会的な役割のひとつではないかと考えています。

絵本展は、学生と教員が横並びになって、ともに何かをつくるという活動であるのも魅



『ようこそ こどものけんりのほん』（白泉社、2023年）

助けてくれる絵本です。

『ようこそ こどものけんりのほん』は、子どもの権利のなかでも、意見表明・参加の権利を中心に描いています。ワークショップでは、子どもの意見表明の土台となる感情表現に注目しました。絵を描くという表現方法をとることで、子どもの思いを出してもらい、その過程をおとなと楽しんでもらえたらと考えました。

当日は、子どもたちがいきいきと絵を描き、そばにいた保護者と話しながらすすめている様子が印象的でした。参加者からは、「絵本を作る体験は初めての子どもたちだったので良い経験になった」といった夏休みの親子の思い出の一つになったことが伝わる感想から、「気持ちを素直に表現することは日常のあわただしさの中ではほとんどないので、子どもの



ながせ まさこ  
長瀬 正子 社会福祉学部社会福祉学科准教授  
愛知県生まれ。大阪府立大学大学院社会福祉学研究科修了。博士（社会福祉学）。専門は、児童福祉、社会的養護。日本社会に子どもの権利の視点を広める「子どもの権利・きもちプロジェクト」代表（<https://note.com/kodomokenri>）。子どもとおとなの対話を助ける絵本を紹介したwebサイト「ちいさなとびら」（<https://chisanatobira.exblog.jp/>）を運営。主な著書に『きかせてあなたのきもち 子どもの権利ってしってる？』（ひだまり舎、2021年）、『子どもアドボカシーと当事者参画のモヤモヤとこれから』（共著、明石書店、2021年）など。

力です。また、O.L.C.の講座に学生が参加することにより、地域の人や現場で実践する専門職といった多様な参加者と対話が深まっていくことも感じます。学生たちが主体的に学んだり、活動する中で得られる経験も大きいですが、私たちが学生の感性や姿勢、そのあり方に教えられることも少なくありません。

今はまだ私が主導でイベントの方向性を決めていくことも多く、学生の声を主軸にしなから形にできていないところに葛藤を感じています。まだまだ試行錯誤の運営ですが、これからも学生とともに、楽しみながら、絵本展を含め、子どもの権利にかかわる活動を続けていきたいと思っています。

### 大学という「場」の力を借りて

もうひとつ工夫していることは、絵本展のイベントとオープンラーニングセンター（O.L.C.）で実施する講座やイベントと連動させていることです。

今年度は、「子どもの権利は子育てのヒン



2023年度O.L.C. 講座「子どもの『声』を聴くわたしになる」で展示された絵本



# 図書館に寄せて

保健医療技術学部看護学科教授 中島小乃美



図書館は教育機関の施設の中でも独特の雰囲気を持つ場所で、それは小学校であっても聖域のような場所だと感じていた。それは子供の頃から本を大切にすることはもちろんのこと、知識の話まったものだから床に置かない、跨ぐようなことはしないなど、親や祖父母に厳しく言われてきたことも関係していると思う。小・中学生の頃は比較的、本が好きだったこともあってよく利用していたが、高校生の頃はクラブ活動と授業の準備で精一杯という状況で、すっかり図書館から遠ざかっていった。ようやく高校3年の夏に受験勉強で街の図書館のお世話になるようになった。一人で勉強しているといふ怠けてしまうところだが、自分と同年代の高校生だけでなく、大学生や大人の利用者が集中して勉強や調べ物に没頭して醸し出すピンと張り詰めた空気を感じ取り、それにあやかろうとしていたことを思い出す。

ところで、私は看護専門学校を経て看護師の資格を取得し、一旦、臨床現場に出てから改めて大学で学ぶことを選択した。当時、仕事をこなすことはできても、患者となった一人の人と向き合う時、人間存在そのものへの問いや、生と死ということを深く考えるだけの知の蓄えがないことに気づいた。自分自身の内面的問いと、苦しむ人をケアする看護師としてどう関わったら良いかわからず、自分の経験や、個人の価値観、倫理観だけでは太刀打ちできない状況に直面した。その時、これまでの自分の学習姿勢がHow toを求めるものであり、自分自身で熟考して答えを出すという力が不足しているのだということに気づいた。生まれて初めて、活字に飢える、という経験をし、系統立てて学び直す必要性を感じて大学に進むことを選択し、看護系大学ではなく人間存在や、生死に関する学問を学ぶことのできる大学を選択した。そのため、文献購読の授業課題や多くのレポート課題のために資料が必要と

なり、図書館には大変お世話になった。

大学の図書館はこれまで知る図書館とは異なり、図書だけでなく、多くの文献を扱うところであった。しかも本学と同様、文系大学の図書館であったことから、第二次大戦後に発行された書籍や資料だけでなく、明治期の研究雑誌やさらに古い古文書、外国語文献などにも親しむことができ、改めて学問の奥深さを図書館の地下書庫の香りとともに感じ取った。知と知の繋がり的重要性に気づいたのは、大学時代に社会学の授業で丸山眞男『日本の思想』（岩波新書）に触れた時であった。日本の学問のありかたを「タコツボ型」とした丸山氏の指摘にハッとされた。明治期に急いで欧米諸国に肩を並べようとして様々な学問形態を一気に導入していった日本の姿

と、第二次大戦以降アメリカ一辺倒になっていった経緯に目を向けることで、日本の看護学が哲学的、思想的な根や基軸をもてない原因の一端を知ることができ、改めて幅広く学ぶことの重要性と、考え追求することの必要性を感じた。

大学院へ進んでから学問のための図書館ということを支に強く感じるようになった。自分の専門分野の文献を読み進める必要があることと、必修単位を修得するために課されるレポートが多いため、必然的に調べ物をするために長い時間を図書館で過ごすことになった。空き時間を利用することから、その時間帯に居る顔ぶれもだいたい決まっており、それぞれが自分の定位置を決めて勉強に勤しんでいた。そんな彼らかと思いつながら自分もまた、お気に入りの席で過ごした。図書館独特の静かでそれぞれが知を探究している雰囲気の中、著作の中に没入することで、時代や空間を超えた深い思索のサマーディ（三昧）に入るような時を過ごすことができた。

この頃、レポートを書くために第二次大戦以降のアメリカの社会背景について調べている中で、レポートのテーマとは直接関係がないのだが、なぜ現在の看護学で扱う看護理論がアメリカで紹介されたものばかりなのかという点について、敗戦後の日本社会の背景や歴史を知ること、さらにアメリカ社会の背景を知ることによって理論の変遷の理解に繋がりを、ハッとしました。学部の際に得た気づきがまた一歩、深まることにも、改めて目先のHow toだけではなく、歴史や社会背景を学び、多様な視点をもって理解を深めることの重要性を実感した。

ところで、私が研究対象としている文献は、8世紀のインドで仏教学が盛んであったナランダ僧院のブツダグヒヤという学僧が著したとされ、チベット語に翻訳されチベット（西藏）大蔵経に納められている文献である。このチベット（西

蔵）大蔵経というのは、チベットの国家事業として長い時間をかけてサンスクリット語からチベット語に翻訳された仏典と註釈が編纂されたものである。この古くて膨大な数の文献を、現代の関心をもつ人々によって研究されているということに不思議さを感じた。なぜならば、医療の世界では最新の研究に重きが置かれるため、このような古い文献に触れることがほとんどなかったからである。そのような自分がひたすら辞書をひっくり返しながら古い文献の読解に取り組んでいることも不思議だが、この文献を紐解く中で8世紀の人物の思索が私自身の理解の大きな手助けとなり、自分の思考の中に溶け込んでいくような経験をした。さらに、文献を通して8世紀の人物が生きた証を感じ取り、このようなかたちで、生きる、ということがあるのだと、人の命と人生を生きることへの不思議さを感じ、文献との出会いによって知のバトンを受け取ったのだと感じることで、この人物の生を確かなもの

『The Tibetan Tripitaka 西藏大蔵経』



として捉えることができた。

このような文献を図書館が所蔵して下さっていることがありがたいことであるが、読むためにはまず大型本を複写するところから始まる。北京版大蔵経はB4版、デルゲ版大蔵経はA3版で複写する必要があるため、見開きページそれぞれ向きを変えて複写するにはなかなか腕力が必要である。この夏に改めて文献が必要になり3時間かけて複写したが、

重い本を操りながら、緩んでいる背表紙に触れ、かつて同じページを複写した人は誰だろうかなどと思い巡らせながら複写をして、本を返却し紫野キャンパスを後にした。余談だが、翌日に腕に違和感を感じ、複写による筋肉痛だと気づいて苦



『チベット医学四部医典医学タンカ詳解』  
PILAR PRESS、2015年

笑した。複写をして筋肉痛になるなど、冗談のような話であるが、文献に親しむことができるのも、先人たちが玄奘三蔵のように命懸けの旅をして入手したものを、近代の技術で書籍の形にしていたただいたおかげで、私たちは手元において読解していくことができる。筋肉痛の中に、時代と地域を超えて受け取る知のバトンを感じること、心地よい痛みを転じることができたひとときであった。

さて、大学院から現在に至るまで仏教文献を通して人間存在や生死の意味を考えてきた一方で、再び教育という形で医療に携わるようになり、改めてこれらの文献を眺めたところ、チベット文献の中にも医学に関するものがあり、サンスクリット文献の中にもアーユルヴェーダとして知られる医学文献があることに気づいた。すでにオイルマツサージを通してアーユルヴェーダを知っていたため、それが聖典として位置付けられていることに気づかずにはいられなかった。これも私の「タコツボ」現象なのだろう。よく考えてみれば医学も宗教も人類の歴史とともに発展しているため、経典が整理され編纂されていくのと同様に、伝統医学も研究され体系化されていくのも不思議はない。しかしチベット医学もアーユルヴェーダも現代の日本社会のように単独の学問領域として発展したわけではなく、思想的な背景と密接に関連し合って発展しているのである。それぞれの医学文献の中には健康の目的が記されているが、チベット医学では、病の原因は貪・瞋・癡の煩惱であり、健康の目的は仏典に学び覚りに至ることであると説かれ、アーユルヴェーダも魂を磨くために健康を維持すると説く。現地調査の中で伝統医学の医師たちが常に聖典（経典）に親しみ、神仏に祈り、誓いを立て診療に臨んでいる姿を見るにつけ、信仰と医療がかけ離れたものではなく、一人の人の行為として具現化されていることに気づいた。



『真理の探究』  
うぶすな書房、2005年

に効率よく蓄えられるものではなく、書物や文献から読み取り、考え続けることによって育まれるものである。だからこそ多くの図書や文献に親しんでいくことが必要だと感じている。なぜならば、知の蓄積だけでなく、これらの蓄積だけでは、知の一つの形であると捉え、これらを知ることが人間理解に繋がっていくからである。このような文献から得られる知に親しむことで、人間の可能性と希望を感じる取ることができ。このような実感は、感情労働としても捉えられがちだが人援助職にこそ必要なことなのではないだろうか。日々、目の前の課題に追われ、疲弊しがちではあるが、時代を超えて読み継がれる文献に触れることで人間の可能性と希望を感じ取り、目の前の対象者の中に可能性を見出す視点を与えてくれるように思う。このような書籍や文献との出会いを期待して、二条キャンパスから紫野キャンパス図書館所蔵の本をリクエストする私である。

文献によって東洋の宗教文化と医療との繋がりを知ることが可能であることと同時に、西洋医学と東洋の伝統思想との繋がりに気づくこともできた。それは、ナイチンゲール著／カラブリア編／竹内喜訳『真理の探究』（うぶすな書院）によって、ナイチンゲールと仏教が繋がったのである。ナイチンゲールは、キリスト教神秘主義を重視した一方で、「神秘主義を健全に発展させるために、イスラム教、仏教、東洋思想、イスラム神秘主義、汎神論などにもあたってみなければならぬ」と述べ、さらに著作の中で「ナイチンゲールの宗教哲学の中心には、すべての神秘主義の基となっている思想が存在している。すなわち、宇宙とはすべてを超越した神の権限ないしは具現であり、人間は意識を変えることで、自分や、自分の世界に内在する神を体験できるという思想である」と記されている。この記述を読んだ時はしばらく呆然とした。歴史的な人物であり、看護職の中で知らない人はいないと断言できるほどの人物が東洋思想、仏教にも関心を示していたこと、さらにアーサー・ショーペンハウエルや、フリードリヒ・シュライエルマッハー、フリードリヒ・マックス・ミュラーらといったサンスクリット学者や仏教、東洋思想の研究の著作にも親しみ、個人的な交流があったことを知ることができた。また西洋哲学のあゆみや、東洋思想との関係などを考えるきっかけとなり、自分自身の中で点と点が繋がって理解が深まり、ナイチンゲール自身も晩年まで多くの著作や思想家との交流をもちながら、自身の信仰と実践を探究していたのだと気づくことができた。

翻って、看護という仕事は対人援助職である。何に依って、どのようなことを考えるかということが看護行為に、患者に触れる手に顕れる。しかし、そのような知の集積は一朝一夕



なかしま このみ  
中島 小乃美 保健医療技術学部看護学科教授

看護専門学校を卒業後、臨床看護師として10年ほど勤務した後に大学に進学。2004年3月、大谷大学大学院文学研究科仏教学専攻修士後期課程満期退学、2006年3月、同大学院博士（文学）。主な著書は、『『一切悪趣清浄儀軌』の研究 - Buddhaguhyaの註釈を中心に-』（起心書房、2012年）、共著『毘沙門天信仰とその伝播-アジア各地における展開-』（起心書房、2022年）、共著『看護学概論 第5版』（医歯薬出版、2022年）、「西チベット・ラダック地方の葬送儀礼にみる命（1） - zhikhroの儀軌と無量寿如来の関係について」（『佛教大学宗教文化ミュージアム紀要』14、2018年）、「チベットの宗教文化にみる命」（『佛教大学宗教文化ミュージアム紀要』15、2019年）、「心をつめるために（1）、（2）」（『日本ホリスティックナーシング研究会誌』2、3、2021年より連載中）

# 電子コンテンツに関する ライセンス情報の開示 —図書館サービスの新たな潮流

図書館専門員 飯野 勝則

## 1 はじめに

図書館ではさまざまな学術情報を電子コンテンツとして提供しています。電子ジャーナルやデータベース、電子ブックなどは多くの利用者にとって身近な存在になっており、それらをどう活用するかが、教育や研究、学習を進める際の重要なファクターに位置づけられています。

一方で、これらを利用する際には、伝統的な「紙」の図書と異なる「使い方のルール」が存在します。たとえば「紙」の図書では、いわゆる著作権法で図書館での著作物の利用を念頭においた「権利制限」などが明確化されており、それに従うことで図書館としてのサービスは十分に展開することができます。しかし電子コンテンツにおいては、著作権法のほかに、それを提供する出版社やデータベースベンダーとの間で、サービスを提供するためのさまざまなルールが契約や覚書などで取り決められており、これはそう単純ではありません。つまり図書館は、著作権法に加え、電子コンテンツの「使い方のルール」を遵守したうえで、利用者向けのサービスを提供する必要があります。

とはいえ、それら電子コンテンツの「使い方のルール」は、著作権法のように一律ではありません。出版社やデータベースベンダーの考え方に拠る部分が多く、これまではそれらの「使い方のルール」を電子コンテンツごとに開示する

ことが難しい状況にありました。しかし、2022年12月に、国立情報学研究所が、主要な出版社やデータベースベンダーにおける「使い方のルール」―これを「ライセンス情報」と言います―を集約し、提供する「電子リソースデータ共有サービス(ライセンス(JUSTICE))」を開始したことにより、大学図書館で、これらを効率的に開示できる環境が実現されました。本稿では、このライセンス情報について、その内容と佛教大学附属図書館での参照方法に関する現状を示したいと思います。

## 2 ライセンス情報が示す 「使い方のルール」

そもそもライセンス情報が示す内容とはどのようなものなのでしょうか。本来、ライセンス情報は図書館と電子コンテンツを提供する出版社などの主体が締結する契約上で取り決めされるものですので、(A) 図書館の職員のみが必要とされる情報と、(B) 利用者が電子コンテンツを利用する際に知っておくべき「使い方のルール」に大別されます。前者(A)は、「契約形態」など図書館の事務的要素が強い内容になりますので、ここで詳細に述べることはしませんが、図書館が電子コンテンツの契約を適切に扱うために、知っておくべき情報となります。もちろん、こういった情報も図書館にとっては重要なのですが、利用者に直接関係する内容では

ありません。従って、利用者へのサービスという視点から考えた際に、より重要になるのが、(B)の「使い方のルール」ということとなります。

(B)「使い方のルール」に該当するライセンス情報の主要例は、以下のようなものになります。

### ① 承認ユーザ定義

該当の電子コンテンツを利用できる利用者について説明します。例：「契約法人に所属する職員、従業員および学生などの構成員」

### ② 同時利用ユーザ

同時にアクセスできる利用者の数を示します。「同時アクセス数」とも言います。例：「無制限」

### ③ ウォークインユーザ注記

「ウォークインユーザ」と呼ばれる、承認ユーザではない利用者―たとえば佛教大学を訪れた他大学の学生―が該当の電子コンテンツを利用できるかを説明します。例：「図書館が利用を認める利用者であれば可能」

これらのライセンス情報を電子コンテンツごとに開示することは、図書館にとっても利用者にとっても重要です。その電子コンテンツを使うことができる利用者とは誰なのかをあらかじめ示しておくことで、意図しない契約違反を防ぐ可能性を高めることができるからです。近年は、コンプライアンスの遵守を強く求められる

ようになっていますが、こういった対策を地道に行うことで、図書館と利用者の双方を守る環境が実現できると考えています。

## 3 実際の事例

ここでは本学図書館の「お気軽検索」の検索結果から、ライセンス情報がどのように表示されているかを確認してみましょう。

図1は『The National Geographic Magazine』の検索結果です。「関連タイトルのサービス」と

いう項目に、「Academic Search Complete」というデータベースと「National Geographic Magazine」という電子ジャーナルサイトへのリンクが形成されています。これらは、該当の雑誌を閲覧できる二つのウェブサービスということになりますが、それぞれ運営主体が異なるため、同じ雑誌であってもライセンス情報に差異が見られます。

では、その差異について内容を確認してみます。確認のためには、それぞれのウェブサービスに対して用意されている「利用条件を表示」



図1

とらう二つのアイコンを活用します。図2は「Academic Search Complete」、図3は「National Geographic Magazine」の「利用条件を表示」を押し、その中身を表示したものです。

まず図2ですが、「承認ユーザ定義」が「大学に所属する教職員・学生(院生含む)」となっています。この定義であれば、本学図書館の利用者のほとんどが該当しそうに思えます。では他大学から図書館を訪れた一時的な利用者はどうでしょうか。「ウォークインユーザ注記」には「[NA] (該当なし)」とあり、何も書かれていま

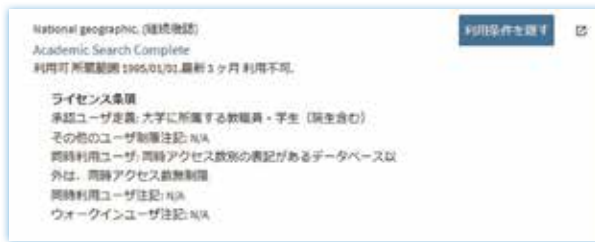


図2



図3

せん。つまり、「Academic Search Complete」の利用は認められなごうこととなります。

図3はどうでしょうか。こちらは「承認ユーザ定義」が「図書館が利用を認める利用者」となっています。これであれば、本学図書館の正規の利用者はすべて該当しそうに思えます。加えて「ウォークインユーザ注記」には、「図書館が利用を認める利用者であれば可能」ともありますから、図書館に入館できた一時的な利用者による利用も認められるということになります。

このように同一の雑誌であっても、そのライセンス情報、すなわち利用条件には差異が見られます。それを利用者に見える形で開示することで、利用者自身が自らに適したウェブサービスを選択できるようになります。もちろん、すべての利用者がこういった「利用条件」を閲覧するとは思いませんが、利用者が知るべき情報を開示できているということが、図書館にとっては重要なこととなります。

#### 4 おわりに

ライセンス情報の開示は、性善説に基づいての活用が期待されます。社会が求めるコンプライアンスを教育機関の中で適切に実現するための一助となるのですが、本機能には期待されているということですが、現段階ではサービスが開始されたばかりということもあり、開示している項目はそれほど多くありませんが、今後はその

充実を図っていく必要があると思います。

一方で課題も存在しています。現状の仕組みでは佛敎大学が契約するすべての電子コンテンツに対して、ライセンス情報が付与されているわけではありません。そのため確認を行いたくとも、それができないデータベースや電子ジャーナルが存在しています。

また現行のライセンス情報の開示は、「お気軽検索」の検索結果からクリックした際に表示されるウェブページ上で行っていますが、データベースや電子ジャーナルによっては、こういった画面を経由せずに、直接電子コンテンツに飛ぶ場合があります。こういった場合には、「利用条件を表示」というアイコンを目にすることはありません。こういった課題をどのように解決していくのか、システム上の工夫が求められる状況にあります。

とはいえ、これまで曖昧な部分が多かった電子コンテンツの「使い方のルール」が、「見える化」したことの意義は揺らぐものではありません。コンプライアンスを遵守しつつ、より適切な形で、信頼性の高い電子コンテンツをサービスできる環境の実現こそが、図書館の目標とするところであり、本機能はその一里塚に該当すると考えれば、その重要性も理解できます。今後の機能的な発展に強く期待するところです。

## 佛敎大学附属図書館の事業活動報告

(2022～2023年度前半期)

4月

「新型コロナウイルス感染拡大防止のための佛敎大学活動基準」レベルに則して、感染防止策を講じたうえで図書館・図書室を開館。「カーボンニュートラル」持続可能な社会を目指して「(佛敎大学教育後援会支援金)に関連した図書を展示。

5月

事務組織改編により、「研究推進部」図書課へ移管。

9月

入退館ゲートトリプレイス(紫野キャンパス図書館・二条キャンパス図書室)

9～10月

「認知症啓発のためのブックレビュー展」社会福祉学部(紫野キャンパス図書館1階展示コーナー)

10月

図書館報『常照』第69号を発行

11月

佛敎大学 Open Research Weeks 2022「洛中洛外図屏風」複製品展示(紫野キャンパス1号館1階)

1～2月

「性・セクシュアリティを通して考える人権」人権教育センター(紫野キャンパス図書館1階展示コーナー・二条図書室) 佛敎大学教育後援会支援金により「電子ブック展 そうだ!電子ブック使おう!」電子ブック77冊購入。

2月

中央展示(2022年4月～2023年3月)

4～5月 名所めぐり:あの花この花(前期・後期)

6～7月 祇園祭(前期・後期)

8～9月 ありし日の京(前期・後期)

10～11月 名所案内周遊ガイド(前期・後期)

12～1月 内裏と仙洞御所(前期・後期)

2～3月 春を読む2023―業平と貫之―(前期・後期)



「認知症啓発のためのブックレビュー展」  
社会福祉学部 2022年9～10月



「電子ブック展 そうだ!電子ブック使おう!」  
教育後援会支援金 2023年4月



中央展示(2023年10～11月)  
「頼光と四天王」

佛教大学附属図書館所蔵  
『洛中洛外図屏風』

原本「洛中洛外図屏風」  
製作者不明 寛文頃 6曲1双  
170×375cm 紙本金地着色

『洛中洛外図屏風』は、国宝の上杉本をはじめとして、十六世紀ごろからさかんに製作され、近世京都の様子を視覚的にうかがうことのできる重要な資料です。

本学所蔵本もそのひとつであり、左右二対、各隻六曲の画面に京都洛外の景色、洛中の町の様子が描かれています。本屏風左隻第四扇に位置する二条城には、現在は失われた天守が描かれており、城門に入る御所車の列が見えます。寛永三年（一六二六）、天守の完成にともなって行なわれた後水尾天皇行幸の様子を描いているものと思われ、製作年代はそれ以降であることがわかります。

左隻では、洛外に紅葉、洛中に二条城へ入る行幸の列が、右隻では洛外に桜花、洛中に祇園会の山鉾巡行が描かれています。左右隻で異なる季節が描かれていること、東西南北

右隻



『洛中洛外図屏風』(複製) 佛教大学附属図書館

第一扇

伏見稲荷大社  
法性寺  
三十三間堂  
新善光寺  
東本願寺

第二扇

清水寺  
大谷本願  
五条大橋  
平等寺  
方広寺大仏殿

第三扇

正法寺 法観寺  
高台寺  
建仁寺  
法国寺  
大雲院  
双林寺  
八坂神社  
四条河原  
冠者殿  
芝居小屋  
金蓮寺  
六角堂  
長楽寺  
仲源寺  
安養寺

第四扇

一心院  
知恩院  
誓願寺

第五扇

南禅寺  
白河橋  
本能寺  
下御霊神社  
新造御所  
永観堂  
金戒光明寺  
善正寺  
真如堂  
三条大橋  
矢田寺

第六扇

鞍馬寺  
上賀茂神社  
相国寺  
吉田神社  
下鴨神社  
御所

左隻



『洛中洛外図屏風』(複製) 佛教大学附属図書館

第一扇

金閣寺  
大徳寺  
大報恩寺  
北野天満宮

第二扇

鳴滝  
龍安寺  
仁和寺  
等持院  
西明寺

第三扇

神護寺  
月輪寺  
妙心寺  
愛宕神社  
清滝

第四扇

清涼寺  
広沢池  
二条城  
広隆寺

第五扇

天龍寺  
神泉苑  
臨川寺  
壬生寺  
大堰川

第六扇

法輪寺  
梅津  
東寺  
本願寺  
西本願寺  
松尾大社  
西芳寺

の広がりの方が異なることにも気づかれます。屏風絵や襖絵では空間的な方向や広がりや一定ではないこと、同一画面においても異なる季節の場面が登場し、時間の推移をもつて描かれることは珍しいことではありません。屏風は折り曲げ、角度をつけてたてまわすこと、みる者の眼が左右上下、斜めと角度を変えながら注がれることを前提に描かれており、立体的な広がりを感じさせることとなります。各部分の画面とともに時空の広がりを感じさせるのが屏風の特徴ともいえます。

本学では、佛教大学附属図書館所蔵『洛中洛外図屏風』の複製品を作成し、「佛教大学Open Research Weeks」等で展示を行いました。

なお、本学の「佛教大学附属図書館デジタルコレクション」では『洛中洛外図屏風』を含め、様々な貴重資料を公開しています。

## 佛教大学附属図書館の沿革と「成徳常照館」の由来

佛教大学附属図書館は、佛教大学の前身佛教専門学校があった京都市左京区鹿ヶ谷の地から、現在の京都市北区紫野に移転した1934（昭和9）年11月23日に木造2階建の閲覧室と、鉄筋コンクリート3階建の書庫を竣工落成しました。この図書館建設にあたっては、佛教専門学校初代校長である土川善激師（浄土宗大本山知恩寺68世住職）に深く帰依された篤志家上村常治郎氏のご遺族から多額の寄付をいただき、完成することができました。その後、1963（昭和38）年9月に開学50周年を記念して閲覧室、書庫などが増築され、1972（昭和47）年4月には、開学60周年記念事業として地上5階地下1階建てで、研究室を配置した複合図書館棟が完成しました。現在の図書館は、開学80周年の記念事業として、同窓会、鷹陵同窓会などの卒業生、在学生ならび保護者、浄土宗寺院をはじめとした、本学有縁の方々からの多大な寄付によって、1995（平成7）年1月に着工し



1997（平成9）年4月に竣工したものです。地上5階地下2階建てで100万冊を収蔵することができま

す。佛教大学附属図書館の建物は、「佛教専門学校附属図書館成徳常照館之記」にある「今ココニ冠スル所ノ成徳常照館ノ名ハ（中略）繙書ノ士専ラ徳器ノ成就ニ努メテ智光ヲ常照スル」から「成徳常照館」と名づけられ、書物をひもとく者が努力して、立派な人格者となり、智慧の光をいつも照らすようにという願いが込められています。この木額は佛教

### 後記

佛教大学附属図書館報『常照』第70号をお届けします。コロナ禍によりICTの需要が加速し、本学図書館も多くの電子資料の利用がありました。大学キャンパスには日常の学生生活が戻ってきました。どうぞ言葉を紡いだ書物を手にお取りください。人生に重なる書物に巡りあえますように。

### 佛教大学附属図書館報『常照』第70号

発行日 令和5年10月23日  
 発行者 佛教大学附属図書館長 藤井透  
 発行所 京都市北区紫野北花ノ坊町96  
 佛教大学附属図書館  
 制作 株式会社栄美通信

- 4月 新型コロナウイルス感染症防止策を講じたうえで図書館・図書室を開館。
- 「電子ブック展 そうだ！電子ブック使おう！」（佛教大学教育後援会支援金）に関連した図書を表示。
- 8月 ブックチェックユニットリプレイス（紫野キャンパス図書館）
- 9～10月 「私が紹介したい認知症に関する図書『ブックレビュー』」社会福祉学部（紫野キャンパス図書館1階展示コーナー）
- 10月 図書館報『常照』第70号を発行
- 中央展示（2023年4月～2023年11月）
- 4～5月 学びのはじまり（前期・後期）
- 6～7月 みやこの夏景色（前期・後期）
- 8月 踊る
- 9月 観月
- 10～11月 頼光と四天王（前期・後期）



2023年4～5月  
「学びのはじまり」



2023年8月  
「踊る」



2023年6～7月  
「みやこの夏景色」



2023年9月  
「観月」



2023年10～11月  
「頼光と四天王」